

大江匡衡 栗田障子十五連作

木戸，裕子
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/10381>

出版情報：文献探究. 29, pp.44-54, 1992-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



大江匡衡 粟田障子十五連作

木戸裕子

(承前)

本稿は前稿(『文献探究』二七号)に引き続き其六から其十五までを載せる。

(ただし其十三は現存せず)

六 過海浦

海浦に過ぎる

經過海浦水漫々

海浦を經過すれば水漫々

幽趣風烟極目看

幽趣風烟は目を極めて看る

聘使家留臨古岸

聘使は家に留まりて古き岸に臨み

漁夫舟泛任輕瀾

漁夫は舟に泛びて輕き瀾に任す

郷心遠樹孤雲隔

郷心遠樹孤雲は隔て

客路邊山落日殘

客路邊山落日は残る

自感去來潮有信

自ら感ず去來たる潮に信有り

不知早晚歌歸鞍

知らず早晚歸鞍を歌むるを

〔校異〕①目一曰(賀)

②看一者(内A) ③聘一躬(松・内B)

躬(傍注) 聘乎(内A)

④古一右(松) ⑤舟泛一〇泛(内A)

⑥樹一村(内B) 村ニセケテ樹(内A) ⑦歌一影(祐・山・賀・神・天)

〔押韻〕寒韻

○××××××××××××××××
 ××○○○○××××××××××××
 ○×××○○××××××××××××
 ××××○○××××××××××××
 ××××○○××××××××××××
 ○×××○○××××××××××××

〔語釈〕

一 幽趣 奥深い趣のある景色。「常云過清景 必約同幽趣」

(秋日懷杓直『白氏文集』卷七)

二 風烟 霞、もや。またそれらを伴う景観。「閑吟聲未已 幽翫

心難足 管領好風烟 輕軟凡草木」(題小橋前新竹招客『白氏文集』

卷八)ただし、本詩の場合、後に述べるように須磨の景物を詠じ

たものとするならば、「風烟」は日本で言う「けむり」を意味し、

須磨の浦での藻塩を焼く煙を表したのか。ただし、当時の日本

漢詩においても「風煙」を「けむり」の意に用いたものは見受け

られない。

三 極目 見渡す限り。「平原遠而極目兮 蔽荊山之高岑」(王仲

宣「登樓賦」)

四 聘使 聘問の使い。招聘するための使者。「故今因聘使、便命

迎之」(『統日本紀』卷三十四光仁天皇寶龜七年四月十五日、前

入唐大使藤原河清への天皇の書)「鵞(ハイ迎人也)聘也」(『黒

川本伊呂波字類抄」)

五 輕瀾 細かい波、さざ波。

六 郷心 故郷を思う心。「貧泥客路粘難出 愁鎖郷心掣不開」(醉

別程秀才『白氏文集』卷六四)

七 客路 旅路

五、六句は『文華秀麗集』巨勢識人「敬和左神策大將軍

春日閑院饒美州藤大守甲州藤判官之作」による。

郷心遠樹孤雲跡 客路邊山片月寒

八 去來 行くことと帰ること。去來 ユキ、タル（『観智院本類聚名義抄』）「風雨蕭蕭 石頭城下木蘭橈 煙月迢迢 金陵渡口去來潮」（韓偓「金陵」）

本句は崔峒「登潤州芙蓉樓」に拠るか。

往來潮有信 朝暮事成非

《通釈》

海辺を通り過ぎれば大海は水を満々とたたえている

趣深い水辺の風景は目の届く限りの彼方まで眺め渡される

都からの使者は家屋の中に居て、故事來歴を秘めた岸に臨み

漁夫は舟に乗り、波のまにまに漁をしている。

故郷を思えば遠い樹にかかる一片の雲が此の地と彼の地を隔て旅路の辺地の山には落日の残照が輝く。

こうしていると自から感得できる、潮の干満に誠があるように私もまた行けば必ず戻れるのだと

しかしいつになったら帰郷するため安んじて馬上に身を休めることができるのだろうか。

《参考》

『惠慶集』一九〇—一三四—一三五

すまのうらにたび人ゆく

まちどをに宮この人は思ふらむすまのはまべはすぎうかりけり

障子のゑにすまのうらのかたかき、神の社にふねよりゆく人の浪のかゝりければたよせにふしをがみてみてぐらたてまつるを

たよせとおもはざらなんわだつみのなみのころをかみしめるらん

又

しらなみにいろひてまがふみてぐらもたかせにうけよしまぬしの神

惠慶の一九〇番歌は匡衡詩の一、二句や七、八句と共通した情景を詠んでおり、したがって本詩は須磨の浦の景色を詠じたものである。

須磨は古來歌枕として著名な地である。匡衡の詩第三句にいう「古岸」もそれを踏まえた措辞であろう。

ただし、『惠慶集』一三四番、一三五番の二首は匡衡の詩の描くところと共通点が少ない。あるいは、後に詠まれる住吉との関連で須磨の浦を通して住吉詣をする場面を描いたのであろうか。

七 泛河到古橋邊 河に泛びて古き橋の辺りに到る

河橋已壞舊名傳 河橋已に壞れて旧き名伝ふ

兩岸寂寥歲月遷 兩岸寂寥として歲月遷る

惆悵晴虹藏不見 惆悵す晴虹の藏れて見えざるを

浪花空混水中烟 浪の花空しく混ず水中の煙

《校異》①橋—道（底本 他本ニヨリ改ム） ②晴虹—虹晴（祐・神）

ナシ（山）

《押韻》仙韻（結句「烟」は先韻だが同用）

○○×××○○ ×××○○××

○×○○○×× ○○○××○○

《語釈》

一 旧名 昔からの名声。ここでは本詩に詠じられた長柄橋が歌枕として古來有名であることを言う。（←参考）

二 惆悵 嘆き悲しむ。「惆悵春帰留不得 紫藤花下漸黄昏」（三）

月三十日題慈恩寺『白氏文集』卷三)

三 晴虹 橋を虹に見立てた表現。中国の漢詩ではしばしば見られるが、この時代の和歌には見受けられない。ただし、「晴虹」は一般には灯の意で用いられ、虹そのものとするものは少ない。

「晴虹橋影出 秋隔櫓聲來」(河亭晴望『白氏文集』卷五四) 白詩の用例は虹を「橋影」と見たもの。「月籠秋隔千行陣 風破晴虹」道橋」(戸部尚書「高天澄遠色」『類聚句題抄』)

一句全体は「礼記」月令「孟冬月一中略一虹蔽不見」に拠る。

四 浪花 波しぶき。

《通釈》

河にかかる橋は既に壊れてしまい、その名のみが伝わっている。舟上から見る兩岸は人気もなく歳月の移り変わりを感じさせる。誠に残念なことだ、有名な長柄橋がなくなって見ることができないとは。

波しぶきだけがいたずらに水面のものと混ざっている。

《参考》

『惠慶集』一九一

ながらのはしをふねゆく

はるのひの(前田本なつのひの)なからのうらにふねとめてい
つれかはしとへとこたへぬ

惠慶の詞書も匡衡の詩題も河に浮かんだ舟の上から橋の痕跡を眺める情景をいう。名所は惠慶集により摂津国の長柄橋であることがわかる。長柄橋は橋柱のみを残す壊れた橋として有名であった。屏風和歌にも比較的多く詠まれ、匡衡よりも一世代前の忠見や信明、能宣なども長柄橋を屏風和歌に詠んでいる。匡衡の詩でも歌枕とし

ての長柄橋の伝統的な姿を詠じているが虹一橋の見立てなど和歌には見られない修辞を用いている。

八海濱神祠

海浜の神祠

海濱祠宇枕烟波

海浜の祠宇煙波に枕る

松岸蘆洲古意多

松の岸芦の洲に古意多し

日暮人歸風定後

日暮れて人帰り風定まりて後

遙聽沙月唱漁歌

遙かに聴く沙月に漁歌を唱へるを

《校異》特ニナン

《押韻》歌韻(初句「波」は戈韻だが同用)

×○○××○○○ ○×○○×××○

××○○○○×× ○○○××○○○

《語釈》

一 祠宇 やしろ、ほこら。「精靈遊此地 祠宇日光輝」(宋之問

「桂州黃潭舜祠」)

二 枕ヨル(『観智院本類聚名義抄』)

三 烟波 もやのかかった水面。「迴頭望南浦 亦在烟波浦」(南

寶郡齋即事寄楊萬州『白氏文集』卷一一)

四 古意 昔ながらの趣。また懐旧の情。「從來多古意 臨眺獨躊

躇」(杜甫「登州城樓」)

《通釈》

海辺の社は霞みわたる水面を背に立ち

岸の松原も葦の生えた洲も古の趣を伝える。

日は暮れて参詣の人も帰り風も凩いだ後は

遙か遠くから砂浜を照らす月の下漁師の歌う歌が聞こえて来る。

〔参考〕

藤原為時 海濱神祠（『本朝麗藻』所収）

晴沙岸上暮江干 鬱々林蘿陰社壇

應是神心嫌苦熱 浪聲松響夏中寒

『惠慶集』一九二

すみよしにあまのいへあり

かせふかぬなつのひなれとすみのえのまつのごすゑはなみそ
たちける

為時詩の題注によれば本詩は住吉祠、すなわち住吉神社を詠じたものである。匡衡詩と為時詩には共通する描写が見受けられる。波の打ち寄せる松原、夕暮れの砂浜などは、住吉を詠んだ和歌にもしばしば見られる。また、匡衡詩と惠慶の和歌との間にも、風の止んだ松原と海という共通の景物が描かれており、それぞれの作は歌枕としての住吉の詠み方に則ったものとなっている。

九 嵯峨野秋望

嵯峨野秋望

何處秋情不可涯 何れの処にか秋の情涯るべからざる

嵯峨曠野 一作野曠 近京華 嵯峨の曠野は京華に近し

影疎堤畔蕭條柳 影は疎し堤の畔に蕭条たる柳

香亂菼間爛熳花 香は乱る菼の間に爛漫たる花

遙漢風高聞隔櫓 遥漢に風高く雁櫓を聞き

遠村雲斷見人家 遠村の雲断たれ人家を見る

興餘軒騎忘歸路 興余りて軒騎歸路を忘る

不奈山西日已斜 奈ともせず山の西に日已に斜めなり

〔校異〕①曠野―野曠（内A・B・松）

②燠―漫（内A・B・松）

③菼―叢（山・賀）

④菼間―葉開 ミセケチ 叢間（内A）葉開（内B） ⑤漢―漁

ミセケチ 漢（内A）漁（内B） ⑥村―樹（底本 他本ニヨリ

改ム）林（天） ⑦見―旦（天・山・祐・神・賀） ⑧忘歸路

―路（内A）忘歸―ナシ（内B）

〔押韻〕麻韻

○×○○ × ○ ○×××○○○
×○○×○○× ○×○○×××○
○×○○××× ×○○××○○○
○○○×××× ○×○○×××○

〔語釈〕

一 何處 「何處」で始まる詩は白居易の作に多い。「何處風光最

可憐妓堂階下砌臺前」（宴周皓大夫光福宅『白氏文集』卷一四）

「何處春深好」（和春深二十首『白氏文集』卷五六）

二 曠野 広々とした野。曠（野）アラノラ（『観智院本類聚名義

抄』）

三 京華 繁華な都。「緑絲文布素輕 珍重京華手自封」（『元

九以緑糸布白輕 見寄製成衣服以詩報知』『白氏文集』卷一七）

四 蕭條 草木の枯れ萎れるさま。

五 爛熳 花の咲き乱れるさま。「種竹交加翠 栽桃爛熳紅」（杜

甫「春日江村五首」其三）

六 遙漢 漢は天の川。「昨夜銀河畔 星文犯遥漢」（陳子昂「酬

李參軍崇嗣旅館見贈」）ここは「雁櫓」との縁で「漢」といい、

遙かな天空を意味するか。わが上に露ぞ置くなる天の河門渡る舟

のかいのしづくか（『古今集』雑上八六三）

七 隔櫓 雁が空を渡るとききの鳴き声。船を漕ぐ櫓の音に似ている

ことから言う。「晴虹橋影出 秋鷹櫓声来」(「河亭晴望」『白氏文集』巻五四)「遙聽雁櫓過 空任蛛網懸」(「述懷古調詩一百韻」『江吏部集』巻中)

八 軒騎 乗り物

九 山西日已斜 白居易「和春深」二十首(一)の内、第一、第三、第十四の三首が尾聯第八句の末語を「日西斜」とし、第九首が「日光斜」とする。残り一六首も第八句の韻字は「斜」である。

《通釈》

一体どこならば秋の風情がかぎりないものであろうか。

それは都に近い嵯峨野の広野である。

大井川畔の柳は葉も枯れ落ちまばらな影を映し、

草むらに咲き誇る秋の花々は馥郁たる薫りを深わせている。

風は空高く吹き、遙かに天空を渡る雁の音が聞こえ

雲の切れ間から遠くの村の人家が見える。

この地のつきせぬ興趣についつい帰ることを忘れてしまうほどだが

しかしもはや如何ともしがたい、夕日は既に山の西に傾いている。

《参考》

藤原為時「嵯峨野秋望」(『和漢兼作集』)

林梢雁陣穿秋霧 山脚人家帶夕陽

為時の句は匡衡詩の第五、六句に相当する。両者は表現の方法こそ違いますが、描かれている景物は秋空を渡る雁の群れ、夕日の沈む山のふもとの人家と全く同じであって、典型的な秋望の場面である。

『惠慶集』一九三

秋さが野に花みる人あり

はなみつゝくれなば野べにやどりせんよのまはむしのこゑ

もきくべく

惠慶集のこの歌は匡衡詩の第四句、及び第七、八句に相当する。

嵯峨野は平安京西の郊外にあり、天皇の行幸があったり、貴族の別業が営まれたりする秋の名所として有名であった。特に秋の花見、前栽掘りなどがよく行われた。従って、先に前稿でとりあげた、熊本氏が其四「春遊原上」に対応すると言われる、

『惠慶集』一三七

せんざいあはせしたるところ

かちまげのかずにはつゆもをきつゝやはなとはなとのいろを

くらふる

はこの「嵯峨野秋望」に対応する和歌と考えられる。

一〇 田家秋意

田家の秋意

田園閑逸有年催

田園閑逸にして年の催す有り

地富風煙税額堆

地は風煙に富み税額堆し

蘆葉聲寒隨水動

芦の葉の聲寒く水に随ひて動く

稻花景美與雲開

稻の花の景美しく雲と与に開く

心兼朝野嘲歸去

心は朝野を兼ね帰去を嘲り

眼望秋山任往来

眼は秋山を望み往来に任す

向爲維舟沙岸道

為に向かふ舟を維ぐ沙岸の道

遇時自得濟川才

時に遇ひて自ら得たり濟川の才

《校異》①意一音(底本・神・賀 他本ニヨリ改ム)

②年一牟ミセケチ年(神) ③兼一菊(天) ④朝野嘲一ナシ(天)

⑤兼朝野嘲ー兼朝（山・賀） ⑥野嘲ーナシ（祐・神）

⑦嘲ー期（底本・内C 内A B・松ニヨリテ改ム） ⑧眼ー服（神）

⑨維ー准（松） ⑩爲向ー爲（内A）向ナシ（内B）

《押韻》哈韻（初句「催」第二句「堆」は灰韻だが哈と同用）

○○○××○○◎ ××○○○××◎

○×○○○××× ××××○○○◎

○○○×○○× ××○○○○×◎

××○○○○×× ×○○××○○◎

《語釈》

一 秋意 秋の趣。「七夕秋意」（『菅家文草』巻五）

二 閑逸 のどかなさま。

三 年催 年が催す。一般に老いることを言うが、ここでは一年の
実りが豊かなことを言うか。「遠尋故院被秋催岸上排松 戸開」
（『江吏部集』巻上「秋日岸院即事」）

四 風煙 水分を含んだもや。かすみや霧。→「過海浦」

五 税額 税として払うべき額。ここでは税として収める作物のこ
とをいう。

六 稻花 稻の花。「去年到郡時麥穗黄離離 今年去郡日稻花白霏
霏」（答劉禹錫白太守行『白氏文集』巻五二）

七 心兼ー この後半部分、頸聯以降は画中の人物を描写する。と
同時にそれを粟田障子の依頼主である藤原道兼に擬し、その風流
心と政治手腕とをたたえる。

八 帰去 帰ること。陶淵明「帰去來辭」にいう、官を捨てて田園
に隱逸することを指す。

九 濟川才 天子の政治を輔佐する才能。『書經』説命篇上「若濟

巨川、用汝作舟楫」に拠る。

《通釈》

田園はのどかで実りの秋を迎える。

大地は潤い、税となる作物はうずたかく積まれている。

水の流れて連れて来られた葉は寒々とした葉ずれの音を立て

雲が晴れるとともに見渡す限り稻の花は美しく開く。

主人は朝廷での務めと私的な風雅の道のどちらにも心を尽くし

ておいでで、昔「帰らなんいざ」と

官を捨て田園に隱遁した陶淵明のかたくなさを嘲り、

秋山の美しい景色を見ても不必要に心を動かされることもなく

自然のままに任せている。

それゆえに船をつないでいる岸辺の道へと歩まれるのだ。

この方こそ時流に遇って自ら大河を渡るがごとき政治の才をお

持ちなのだから。

《参考》

高丘相如 田家秋意（『和漢朗詠集』）

蕭索村風吹笛処 荒涼隣月擣衣程

同 田家秋意（『新撰朗詠集』）

牛休門菽花寒処 犬吠園林葉落声

藤原為時 田家秋意（『和漢兼作集』）

三巴峡月雲收白 七里灘波葉落紅

相如、為時のどちらも詩全体の後半部と思われる。匡衡の作が日
中の風景を詠じているらしいのに対し、これらの句では月が詠まれ
ており、夜の景を描いているところが問題だが、為時の句は匡衡詩
の第七、八句に対応していると考えられるので、三作とも同じ障子絵

に賦された詩と判定し得る。相如の作は牛飼いの笛の音、砧の音、村に飼われている牛や犬の姿など、中国の田家詩と共通する景物を描いているが、匡衡の詩は稻のそよぐ田園風景であり、どちらかという和歌に描かれる風景と重なるものがある。しかしながら、匡衡の作も後半では「帰去来辞」や『書経』の記事など漢籍に典故を求めている。これは為時が、川沿いの景を表現するのに「三巴峡」や「七里灘」などの中国の名所を使っているのと同じであり、漢詩的な手法である。

『惠慶集』一九四 一三八

大井にいかたたくす紅葉みる人あり

大井河いかたのさほもさすまなくにしきにみゆるなみのうへ

哉

はがたてゝわらはのとりとるところ

思ふことなきよなるべしむらどりのけさはなくねのたえてきこ

えぬ

惠慶一九四は紅葉を見ることが主題になっており田家を詠んだものではない。しかし、熊本氏も指摘されるとおり、匡衡詩の第七、八句、また為時の作と通じるので同じ絵に賦されたものといえる。田園風景から次の紅葉した林の場面へと移るところを詠んだものであろうか。また、一三八は匡衡の作と共通する所はないが、稲田での景と考えられる。なお、大井河を詠んだ歌で田園風景を詠むものは珍しい。

一一 林下晚眺

林下の晚眺

幽訪勝意依々

幽を^こめ勝を訪へば^こ意依々たり

晚望興深惜落輝

晚望興深く落輝を惜しむ

林下由來風月地

林下は由來風月の地

同遊過此欲何歸

同じく遊び此に過ぎる何ぞ帰らんとする

《校異》① 趁一赴(天・祐・山・神・賀)

② 深一除(ミセケテ 深)

(内A) ③ 輝一暉(内AB・松) 耀(神)

《押韻》微韻

×○○××○○◎

×○○○○××◎

○○○○○○××

○○○○××○○◎

《語釈》

一 趁 モトム (『観智院本類聚名義抄』)

二 依々 慕わしい気持ち。「未及彈興酌 相對已依依」(対琴酒)

『白氏文集』卷六三(一)

三 落輝 落日。

四 由来 もとより。元(来) モトヨリ 由(来) 同 (『観智院本類聚名義抄』)

「由来感恩在秋天 多被當時節物牽」(『和漢朗詠集』卷上秋興)

《通釈》

静閑の地を求め景勝を訪ねれば慕わしさが募る。

夕暮れの景色は趣深く日の沈むのが惜しく感じられる。

この林は昔から風流閑雅の地である。

我ら共にこの地を訪れ、どうして早くも帰途に着こうとするの

か。

《参考》

『惠慶集』一三六 一三九 一九五

十月ばかりにたひゆく人のもみちしたる木のもとにやとりた

るを

行すまはもみちのもとにやとらしおしむにたひの日か
すへぬへし

もみちによふことりのいたるかたあり山みちゆく人あり
もみちみてかへらんこともおほえぬによふことりさへな
くやまち哉

こゝるのもりにもみちみる人あり

人のおやの思ふこゝろやいかならんこゝるのもりのあき
の夕ぐれ

『拾遺抄』秋

二条右大臣の栗田の山庄の障子のゑにたび人の紅葉ある所に
やどりたるかたある所に 恵慶法師

いまよりはもみちのもとにやどからじをしむに旅のひかすへぬ
べし

『恵慶集』一三六は、少し異同があるが同じ歌である『拾遺抄』

秋部の歌の詞書により確実に栗田障子和歌である。内容も「おしむ
にたびの日かすへぬべし」が匡衡詩の四句「何ぞ帰らんとする」に
相当している。また、一九五に関して、熊本氏はその詞書により匡
衡の作が伊豆の子恋の森を詠じたものとされる。子恋の森と紅葉が
結び付いた和歌は珍しく、やや疑問も残るが、『恵慶集』の一八五
からの一連の歌群の配列からいって本歌は「林下晚眺」詩に対応す
るものであろう。そうであれば、一三九は「子恋」↓「呼子鳥」と
いう連想によって構成された和歌となる。

一二 初冬野獵

初冬の野獵

寒風獵々草枯辰

寒き風獵々として草枯るる辰あした

牽大呼鷹起野麋 犬を牽き鷹を呼べば野麋起く

多獵豈唯今日樂 多獵は豈に唯今日の樂しびのみならんや

文王昔過渭陽人 文王昔過へり渭陽の人

《校異》①獵ミセケチ 獵ミセケチ (内A) 獵ミセケチ (内B) ②風ミセケチ 風ミセケチ

④麋多ミセケチ 麋多ミセケチ (内A) 麋多ミセケチ (内B)

《押韻》真韻

○○×××○○○ ○×○○×××○

○○×○○××× ○○○×××○○○

《語釈》

一 獵々 風の吹く音。「鱗鱗夕雲起 獵獵曉風道」(鮑照「還都
道中作」)

二 文王 周の始祖。息子の武王が殷を滅ぼした後文王と称した。

三 渭陽人 周の文王が渭陽に狩りをしたときに出会った太公望呂
尚のこと。「六韜曰、周文王卜畋、史扁為兆曰、所獲非熊、
乃天遣汝師。文王乃齊戒七日、畋于渭濱之陽。果卒見呂望坐石茅

釣。与論道德。遂同載而歸。」(『古注蒙求』呂望非熊)

《通釈》

寒々とした風が吹きすさび草葉も冬枯れる早朝。

獵犬を引き出し鷹狩りの鷹を呼べば土埃が巻き上がる。

多くの獲物を狩るのはただ今日一日の樂しみのためではない。

かつて周の文王が狩りに出て渭陽のほとりで太公望呂尚という

賢人を見出した故事に倣おうというのだ。

《参考》

『恵慶集』一九七

冬かたのにかりするところ

あさまだきしもうちはらひかりにくるかたの、きじはたちやし

ぬらん

交野は鷹狩りで有名な歌枕である。匡衡の詩では「寒風」、惠慶の和歌では「霜」となっているが、どちらも寒い朝の枯れ野での狩りの風景を描いている。

一四 題玉井山居 玉井山居に題す

始知玉井在中庭 遥かに分く岷嶺風流の美

遙かに分く岷嶺風流の美 暗に写す華林水気の馨

暗に写す華林水気の馨 数点の苔優して石甃を蔽し

数点の苔優して石甃を蔽し 孤輪の月落ちて銀瓶を見す

孤輪の月落ちて銀瓶を見す 佳人凝睇巻簾坐

佳人凝睇巻簾坐 雲樹重々として山色青し

雲樹重々として山色青し 雲樹重々山色青

雲樹重々山色青 佳人凝睇巻簾坐

佳人凝睇巻簾坐 雲樹重々として山色青し

雲樹重々として山色青し 佳人凝睇巻簾坐

佳人凝睇巻簾坐 雲樹重々として山色青し

雲樹重々として山色青し 佳人凝睇巻簾坐

佳人凝睇巻簾坐 雲樹重々として山色青し

雲樹重々として山色青し 佳人凝睇巻簾坐

佳人凝睇巻簾坐 雲樹重々として山色青し

雲樹重々として山色青し 佳人凝睇巻簾坐

〔語釈〕

一 玉井 山城国の歌枕。もち月のうつれるほとをみる人やいひはしめけむたまの井の水（『匡衡集』一〇）ただし、同じ粟田障子詩である藤原為時の「題玉井山庄」は題注に「和泉国云々」とある。また、匡衡詩の第二句の「玉井」は「玉のように美しい水をたたえた井」という意味の普通名詞として用いられている。

二 恣得 恣の読みは一一「林下晚眺」参照。得は唐代の助字で意味は殆どない。（小島憲之氏の御教示による。）

三 岷嶺 崑崙山のこと。中国西方に在り西王母が住むと考えられた靈山。

四 華林 華林園。洛陽にある魏の宮園。初め芳林園といい後華林園と改められた。「洛陽図経曰、華林園在城内東北隅。魏明帝起、名芳林園、齊王改為華林」（『文選』卷二十応吉甫「晋武帝華林園集詩一首」李善注）

五 石甃 石だたみ。「石甃冷蒼苔 寒泉堪孤月」（李白「桓公井」）

六 銀瓶 銀製のつるべ。「井底引銀瓶 銀瓶欲上糸繩絶」（新楽府四〇井底引銀瓶『白氏文集』卷四）

七 凝睇 注視する。凝睇（ギョウテイ）（黒川本・前田本伊呂波字類抄）（「含情凝睇謝君主 一別音容兩渺茫」（長恨歌『白氏文集』卷二二）

八 雲樹 雲がかかった樹木。「萬重雲樹山頭翠 百尺花樓江畔開」（花樓望雪命宴賦詩『白氏文集』卷二〇）

〔通釈〕 山莊を訪ねてこの場所の地形を眺めれば 今氣付いた、玉のように清らかな井戸が中庭に沸き出している

ことに。

この地は西王母の住むという遥か彼方の靈山崐崘山の風流な美しさを思わせ、

又、魏の名園華林園の山水の景を写している。

井戸の周りにはいくばくかの苔が生え石畳を被い、

水面に一片の月が影を落としているのは銀のつるべが浮かんでいるかのようだ。

山荘のうちでは美女が簾を巻き上げ一点をじっと見つめ座っている。

雲を込めた樹々が重なり合い、山々は青く霞んでいる。

〔参考〕

藤原為時 題玉井山庄（在和泉国云々）

玉井佳名被世称 松楹半接碧巖稜

山雲繞舍窓窺幔 澗月臨窓欲代灯

梅發寒花朝見雪 水収幽響夜知氷

池辺何物相尋到 雁作來賓鶴作朋

為時詩の第一句に「佳名世に称せらる」とあり、匡衡詩に「始めて玉の井の中庭にあるを知る」とあるごとく、玉の井は清水の涌く所として名高い。匡衡と為時は、雲のこめた山や水に映る月などほぼ同じ山里の閑寂な情景を描写している。二つの作の違いはそれぞれの尾聯に見られる。匡衡は「美人睇を凝らし簾を巻きて座す」と山里に寂しく暮らす女性が物思いにふける姿を描く。なるほどもの思う美女は、中国の閨怨詩でもおなじみの題材だが、それを山居と結び付けたものは殆ど見受けられない。それを敢えて漢詩に表現し、中国本来の漢詩と違うものを目指したのではないか。

それは為時の作と比べたときにいっそうはつきりする。為時の尾聯においては、女性の姿はなく、池のほとりに雁と鶴が飛び来っている景が描かれる。これは明らかに、中国的な山居詩に倣ったものである。特に鶴は神仙的なイメージを持つ鳥であり、為時の詩を読む限りではこの画面は山居隠遁図という印象が強い。匡衡も第三、四句では「崐嶺」や「華林」など中国の地名を用いており、特に崐嶺は神仙の住む場所でもあり、中国の山居詩風の効果もねらっている。と同時に大和絵の画面を生かした作を試みたのであろう。

一五 歳暮旅行

歳暮の旅行

水宿山行羈旅身

水宿山行羈旅する身

窮陰慘愴自經旬

窮陰慘愴として自ら旬を経たり

雪深雖指前程遠

雪深く前程遠きを指すと雖も

唯喜中途欲遇春

唯喜ぶ中途に春に遇はんとするを

〔校異〕特ニナシ

〔押韻〕諄韻（初句「身」は真韻だが同用）

×○○○○×

○○×××○○

×○○×○○×

○○○○×××

〔語釈〕

一 水宿 水辺に宿ること。「一官萬里向千溪 水宿山行魚浦西」

（李嘉祐「送従弟永任饒州録事參軍」）

二 山行 山道を行く。「遡溪終水涉 登嶺始山行」（謝靈運「初去郡」）

三 羈旅 旅行。故郷を離れ遠国に身を寄せること。「羈旅無終極

憂思壯難任」（王仲宣「七哀詩」其二）

四 窮陰 冬の末。十二月。

五 慘憺 物寂しいさま。

第二句は『白氏文集』巻六十二「歳暮」に拠る。

慘澹歳云暮 窮陰動経旬

六 前程遠 行く先が遠い。大江朝綱「夏夜於鴻臚館饒北客序」に拠るか。

前途程遠 馳思於雁山之暮雲

〔通釈〕

水辺に宿り山道を行く、遠国へ赴任するこの身。

陰氣の窮まった十二月の空は物寂しく、いつのまにか十日が過ぎてしまった。

この道は雪が深く積もり、行く手は遥かだが

ただただ嬉しく思う、この道の途中で必ずや春の恵みに会うであらうことを。

〔参考〕

『惠慶集』には本詩に対応する和歌がなく、何の名所を描いた絵に賦した詩かははっきりしない。しかし、「羈旅」の語を含む「羈旅之臣」なる成語があり、「祖国を離れ他国の客分として仕える臣」という意味なので、本詩は、あるいは、国司として赴任する人が雪の中を旅する画面に賦したものではなからうか。そうだとすれば、最後の「中途春に遇はんとする」という言葉には匡衡自身の栄達願望が込められているのかもしれない。

また、名所絵であると共に四季絵でもある粟田障子絵に賦した十五連作の最後にあたって春への期待を述べることは、『古今集』四季部の配列に見える季節の連環を意識したものとも考えられる。

付記 前稿の解説文及びその注に誤りがありました。

(誤) 九頁下段二十二行目(兼家カ)

(正) (道兼カ)

(誤) 注1「粟田障子詩絵と和歌と漢詩」

(正) 注1「惠慶集と江吏部集―粟田山庄障子絵と和歌

と漢詩―」

お詫びして訂正いたします。

また、粟田障子詩其三「橋上歌馬」の書き下しについて、

「幾」は平安時代の読みであれば「ほとほと」とするのが適切ではないかという御指摘を小島憲之先生から頂きました。

この場を借りてお礼申し上げ、訂正させて頂きます。

なお、本稿を成すに当たっては熊本大学の金原理先生の御学恩を受けました。深くお礼申し上げます。

―九州大学大学院博士課程―